

江戸文化の魅力を探る

都立白鷗高等学校・附属中学校時間講師 寺尾隆雄

田沼時代…大岡忠光の没した1760年代から1786年までの27年間

大河ドラマ【べらぼう】の時代背景 →田沼時代～松平定信の寛政の改革

田沼時代（田沼意次＝10代将軍徳川家治 1767～86）

※小姓から昇進して側用人・老中となる。

性格…**現実主義**、側近官僚の優越→享保改革の帰結

商業資本との積極的な結びつき→賄賂の横行へ向かったと言われる？

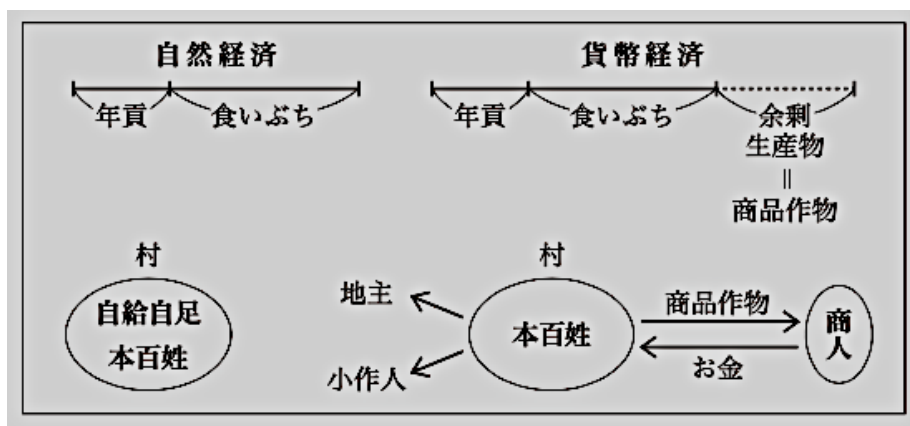
→米（自然経済）から金（貨幣経済）の時代に



田沼意次



九代将軍徳川家重



※意次の父意行(もとゆき)について

紀州徳川家の足輕で徳川吉宗が8代将軍になった時、**旗本**となる。禄高は低く **600石**。

※意次の異例の出世

將軍家重の小姓→40歳 城持ち大名（静岡相良）→49歳 側用人→51歳 老中格→54歳 老中

⇒將軍家重の小姓。家重の言語障害の言葉を理解できた。

家重が釣りをしていて「へさしへさし」と言って誰も側にいた者がその意味を理解できなかったが、田沼意次だけが「えさし」だったことを理解した。つまり釣りにあきて鳥をさそうと思ったと分かった。

施策 **商業重視**

…**専売制度**の拡張〔幕府直営の銅・真鍮・朝鮮人参・鉄座など設置（座や会所を設ける）〕

株仲間の積極的公認（**運上・冥加**の増徴）

貿易の拡大…**長崎貿易制限緩和**（銅・**倭物**による支払い）→**金銀輸入方針**



いりこ・ほしあわび・ふかのひれなど海産物

長崎貿易では、倭物の輸出が重要視された。図は長崎出島における取り引き。

『蘭館図巻』

・松前昆布の生産 昆布は中国への主要な輸出海産物で、意次は産地の蝦夷地に強い関心をもつ。



倭物の計量



昆布漁

開国をしようとオランダ船と同じ大船を造ろうとして、ジャワ・バタビアから造船技師を招こうとした。

→三本マストの【三国丸】を造る。

南鑊二朱判（銀）の鑄造（ヨーロッパ・中国・チベット・安南(現ベトナム)から銀を輸入）



（南鑊八片を以て小判一両に換うと明示、銀の純度

97.81%）

西日本の銀遣い経済圏と東日本の金遣い経済圏をリンクさせる南鑊二朱判（銀）を造る。



・金貨（計数貨幣）

1両＝4分＝16朱

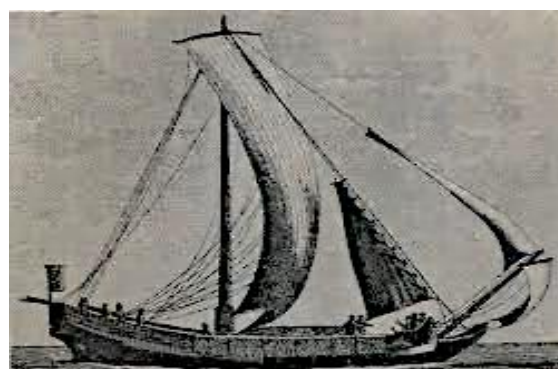
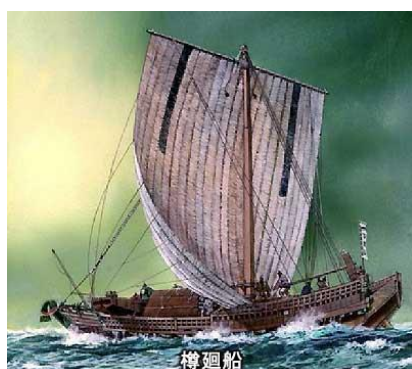
・銀貨（秤量貨幣）

1貫＝1000匁（もんめ）

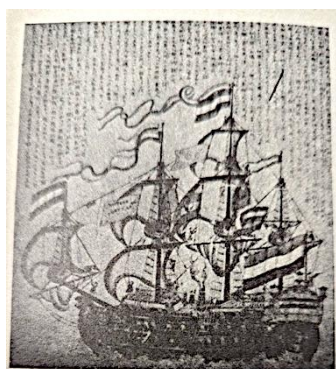
南鑊二朱判8枚＝1両（16朱）



初めて輸入した外国通貨↑



※仏人 ラ＝ペルーズが見た三国丸

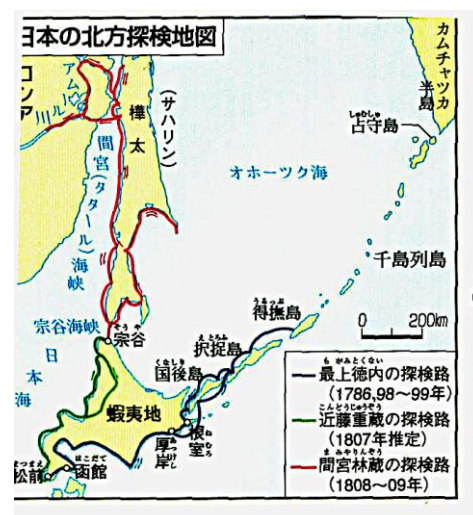


オランダ大船の図

（林子平作長崎版画）



最上徳内（ウルップ島でアイヌと寝起きを共にする）



開発計画

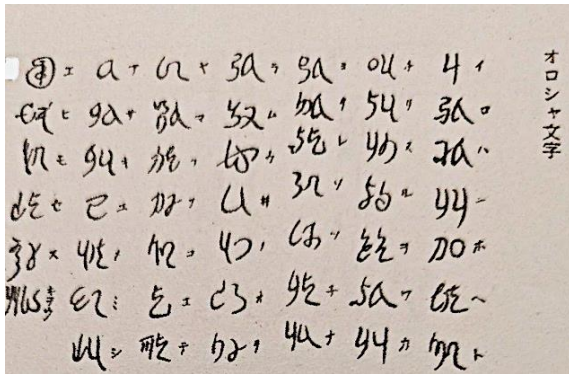
…印旛沼・手賀沼の干拓企図（1782～86）

蝦夷地開発計画（工藤平助の『赤蝦夷風説考』の影響）

探検（最上徳内派遣）→対露貿易も計画（三国丸を石狩川まで派遣している）

※最上徳内はエトロフ島～ウルップ島を調べアイヌと起居をとにする。

オロシャ文字



工藤平助『赤蝦夷風説考』より抜粋



エゾ人



俵物の計量

長崎貿易では、俵物の輸出が重要視された。

図は長崎出島における取り引き。

『蘭館図巻』



松前昆布の生産 昆布は中国への主要な輸出海産物で、意次は産地の蝦夷地に強い関心をもった。



結果…賄賂政治への不評?

天災頻発…天明飢饉(1782~87)(奥羽地方冷害)

浅間山噴火(1783)

百姓一揆・打ちこわし頻発



浅間山の噴火(1783年)



鎌原観音堂の遺体

⇒田沼意知の暗殺(1784)と意次罷免(1786)

※世間は親の因果が子にむくいとはやした。

※田沼意知を殺した佐野善左衛門政言は世直し大明神と呼ばれた。

→ 狂歌 やみの夜に光りかがやく七つ星夜明けてみれば跡かたも無し

何故田沼意次が賄賂政治家と評価されてしまったのか？



辻善之助 東京大学史料編纂所初代所長。

編纂所の基礎を築き、文化史・仏教史 に業績を残した。

※田沼意次の収賄汚職談は大正4年刊行 辻善之助『田沼時代』によって国民的常識にまで広められたもの。

※田沼を憎んだつくり話もあった。

※金銀は人間の命の2番目だからそういう宝物を出してお役入りをしたいのは、それはきっといいご奉公をするに違いない。と書いてあるものもあるが、田沼がもらったという証拠はない。

但し、辻善之助は以下のことは評価している。

※田沼はロシアとの貿易をはかる

※**三国丸**…和船をベースにオランダ洋式船と中国船ジャンクを取り入れた船を造る。(中国・日本・オランダ)

田沼時代は科学・学問・医学が発達した時代

『解体新書』(杉田玄白・前野良沢・中川淳庵・桂川甫周)

→ オランダの人体解剖図を描いたターヘル＝アナトミアと中国の人体図比較し、その正確さに驚く。

①平賀源内と田沼意次

田沼時代は科学のめざましい発達がみられた時代で**解体新書**もつくられた。

※青茶婆解剖 **腺** の字を創る 千住骨ヶ原(小塚原)

で腑分け

意次は好奇心旺盛でオランダ好みでオランダの時計、寒暖計、晴雨計を集めた。

※洋学は8代将軍吉宗が漢訳洋書の禁をゆるめ、青木昆陽・野呂元文に命じてオランダ語を学習させたことが糸口。(それ以前は『西洋紀聞』、『采覧異言』をあらわして西洋の地理・風俗・文化に理解をしめした新井白石がいた)

平賀源内について

※源内号 ※俳句→李山、物理学→鳩溪

※劇作→風来山人、天竺浪人 ※浄瑠璃→福内鬼外

※幼時天狗小僧と言われた。非凡の才人

※香川高松藩を脱藩していたため、

意次に仕官できなかった。

※エレキテルの製作「人体に電気を流して病を治す」

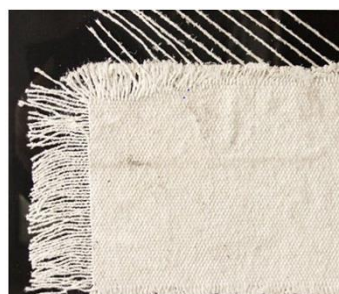
※砂糖製造法、源内焼(陶器)の製作、朝鮮人参の栽培

※火浣布製作(秩父で石綿＝アスベストを発見して香炉の下に敷く燃えない布を造る)

※日本初のライターを作る。



平賀源内像



(源内製火浣布 転載元: (株) 平賀源内記念館所蔵)



平賀源内の「刻みたばこ用点火器」

享保13(1728)年、讃岐国 志度浦(香川県大川郡志度町)に生まれる。父は高松藩の下級武士(白石茂左衛門)。父の死後、先祖の姓の平賀に改姓、高松藩に仕える。25才の時、長崎に留学、海外の新知識を得、やがて地方にうもれることをきらい、妹婿に家督を譲り、29才で江戸に出る。江戸で田村元雄について本草学を学び、昌平黌で儒学を学ぶ。師の田村元雄に勤めて我が国最初の物産会(薬品会)を江戸湯島で開き、以後5回まで全国から草木・鳥獣・魚介・昆虫などを集めて開く。物産会の成果として『物類品鑑』を著す。→1761年、高松藩を脱藩。浪人となり、多方面の活躍をした。火浣布(石綿で織った布)、を創作した。

タルモメイトル(温度計)、エレキテル(電気器械)もつくる。浄瑠璃『神霊矢口の渡』を著わし、鉱山調査で秋田に行き、西洋画を教えた(秋田系蘭画)→天才マルチ人間

晩年には発作的な乱心から人を殺してしまい、牢の中で病死(52才)

→源内の心友杉田玄白は「ああ非常の人、非常の事を好み、行ない、是非常何ぞ非常に死するや」という浅草総泉寺に墓碑をたてた。

田沼意次の城下町静岡相良^{さがら}には、意次が源内を相良に匿って、寺尾宗兵衛=平賀源内だという源内伝説がある。

(郷土史家川原崎次郎著『平賀源内と相良風』)



平賀源内と田沼意次とのエピソード

平賀源内が子どもの頃製作した御神酒天神

※源内を私的ブレンとする

田沼が愛した天才奇人は源内は田沼邸=旧気象庁(竹橋の神田橋付近)意次邸を訪れ、意次に飛行船を贈っている(気球と思われる)。意次はそのお返しに砂糖の折箱を与えた。源内が持って帰ると底の方に金百両があった。意次はこれを研究費にあげたらしい。

エレキテルの治療を田沼夫人や子息達が見に行っている。



金唐革の煙草入れ

②辻善之助の田沼意次に対する評価の誤りについて

(史料の正しい扱い方について)

史料 『伊達家文書』…伊達重村が中將の位に昇進するために田沼に手をまわしている有様が書かれていて、辻氏は側用人田沼意次を悪玉とし、老中松平武元を善玉としている。

※大名家の文書は当時、官憲がないので正確な記述と言える(一級史料)↓

しかし、『伊達家文書』の記述をよく読むと伊達重村が中將の位にのぼるため、以下の三人に的をしぼって工作することとしたことが書かれている。

- ・老女 高岳(大奥)→家を一軒建ててもらっている。
- ・老中 松平武元→「めだたないよう供の人数もへらして長屋のほうへ来るように」と指示している。
- ・側用人 **田沼意次**→「御丁寧の御事、わざわざ御出にもおよばず」と手紙で断わっている。(大石慎三郎説)



田沼時代の風俗(浮世絵)

※八等身=フランスの印象派の影響を受けている洋画

史料 『甲子夜話』…九州 平戸藩主 松浦静山の作で静山が20才の時、田沼の屋敷に行った時、日夜多くの人々がおしかけ、控えの間には幾十、幾百となく、刀掛けがあり、海の波のようであった。座敷はいっぱい平伏して挨拶できない。静山は陪臣のくせに私を軽く扱ったと書いている。

→これを根拠に辻氏は田沼評価をしている。

※陪臣…また家来のこと。(これは静山の勘違い)

将軍—大名—家臣

しかし、この作者 松浦静山は田沼意次の敵と仲が良い人物でこれを用いて田沼評価をすることは一面的見方である。

結論…2つの史料で前者は史料を正確に読まなかった例、後者は的確な史料を用いず、中立的立場の史料を用いなかった例で田沼評価の正しい根拠とならない。

③南鐐二朱判(銀)について

㉑前段階として五匁銀(1765)の発行…明和五匁銀×12枚=金1両とした。(当時、銀は秤量貨幣だった)

※五匁と記して、いちいち秤にかけなくてもよくした。今後は銀相場に関係なく12枚を以て金1両とすると定めた。

㉒真鍮銭(四文銭)→1億5,742万5,362枚発行したと言われる。

㉓南鐐二朱判(含有量97.81%)→中国・チベット・安南より金銀貨輸入

「南鐐八片を以て小判一両に換う」と表示

意義 金1両=南鐐二朱判8枚となり、金遣い経済圏(東日本)と銀遣い経済圏を結びつけて統一通貨としようとした。

(商品流通が全国的になってきたので、金、銀の両経済圏がリンクする統一通貨が必要に)

④田沼評価のあやまりその他のまちがった記述例

日本文化史別録(辻善之助著)に米580万俵、金銀7億80万両、意次がもっていたとあるが、田沼の城、相良城取毀しの際の相良御引渡御城毀一件という資料が発見され、そこから金^{きんず}1万3,000両、米1,500俵しか、相良城になかったことがわかった。

読売新聞社 日本の歴史

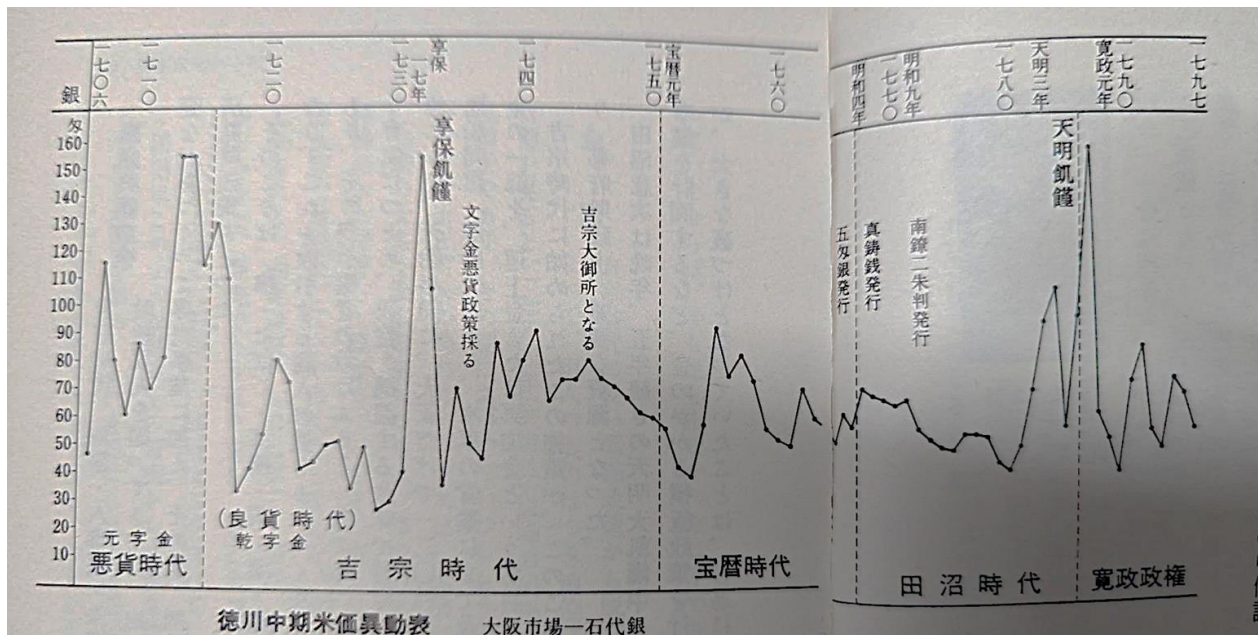
①老中松平武元を田沼意次が狩りに誘ってつかれ死にさせたと書いてあるが、武元67才、意次62才で武元だけつかれ死にするのか？

②「生きている京人形」という小見出し付きで、「ある所から意次の所へ京人形一箱として贈ってきたのを聞いてみたら、中から生きた京人形、つまり京美人が立派な着物を着て出てきた」ということもあったとある。

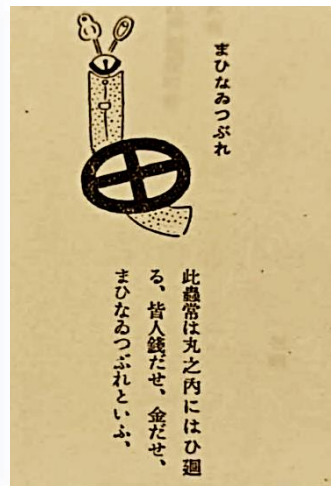
⇒しかし『甲子夜話』には勘定奉行松本伊豆守、赤井越前守が互いに贈答品の大きさを競い合っていたとある。これ自体も実話ではなく歌舞伎「京人形 左 影」からの盗作らしい。

中央公論 日本の歴史には家治の子(家基)が意次によって毒殺された。(鷹狩に池原雲伯という医師がついていったが、彼が意次の意を受けて毒を一服もったという)そこで一年おいた天明元年に、一橋治済の長男豊千代(後の徳川家斉)が将軍に迎えられた。これは意次の弟意誠が一橋家の家老となっていたから、治済と連絡してやったとしている。

⇒しかし、田沼には動機がないし、家基が急死（鷹狩りに行った3日後に死ぬ）した1779年よりさかのぼること（1773年12月19日）に意誠は死んでいる。（以上が真実）



（後藤一朗『田沼意次 その虚実』より引用）



⇒当時の週刊誌的な本
山川出版社の教科書に
出ていた。

（辻善之助著『日本文化史 別録四』より）↑

※あえてさがせば丸に十の字はどうみても島津（薩摩）

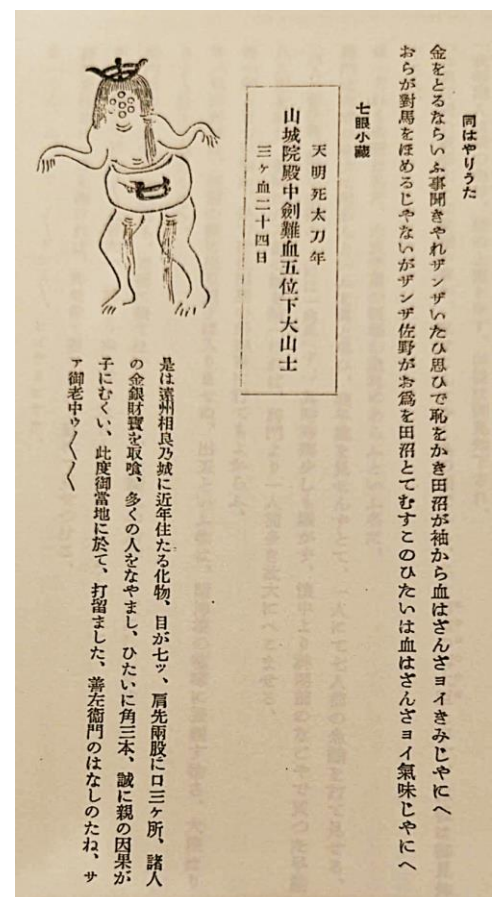
⑤江戸時代の賄賂について

賄賂をとることは以下の意味をもつ。

㊶江戸時代初期、大名から老中が金をもらうことはその財力をけずり、謀反の心配をなくすることになる。
すなわち将軍に対する奉公であるとする。

収賄即奉公⇒荻生徂徠『政談』より

㊷小額だが回数が多く、顔をつなぐため＝合法として公認されていた。（お中元・お歳暮現象）

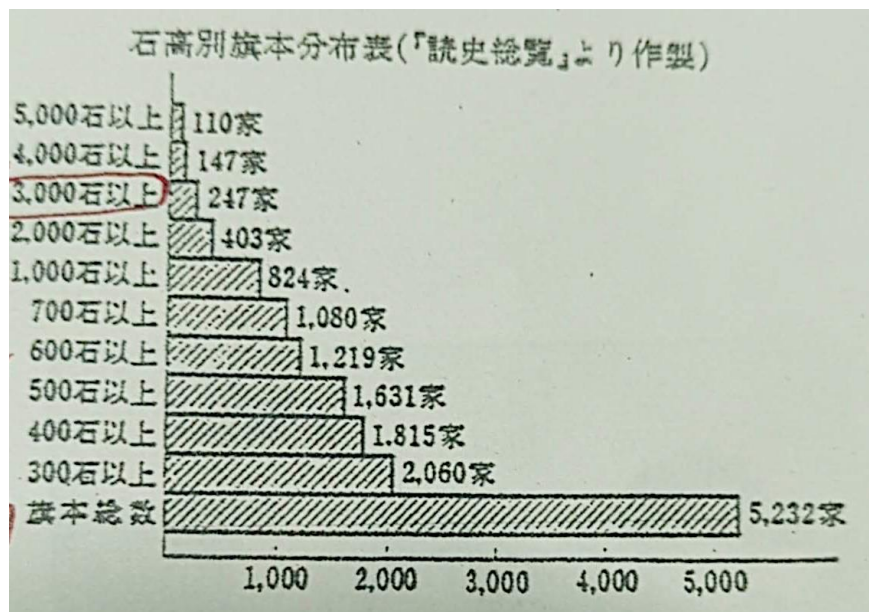


㊦身分の低い者が出世するためには賄賂をつかうことは当たり前。家格重視の社会では人間の能力の有効利用ができない（硬構造）。

側用人田沼意次や柳沢吉保が登場できたのは將軍の絶対権があったため（柔構造）。

※下層有能者（身分が低い）
硬構造の出世と柔構造の出世

町奉行は3,000石格→



㊦最近の田沼意次の評価について

積極政策…収入増大策

意次は農村からの年貢収入の限界を知り、商品経済に目を向けた点で積極政策として評価を受けている。
＝近代税法といえる

田沼が憎まれ悪評判となった理由—従来の譜代門閥層が下賤の出、身分の低い者が出世し、すばらしい新政策を出したことに対するねたみをもった。



平賀源内の西洋画

江戸の司馬江漢

秋田の平賀源内



源内の弟子、小田野直武の遠近法を用いた

「不忍池図」



（後藤一朗

↑

『田沼意次 その虚実』より引用）

Titsingh: Memoirs et anecdotes des Djoguns.
Appendice Fragmens de poésie Japonaise.

Ki ra re ta wa
Ba ka to si yo ri to
Ki kou ta fa ya
Ya ma mo o si ro mo
Sa wa gou sin ban.

(斬られたは
ばか年寄と
聞くとはや
山もお城も
さむく新番)

Ya ma si ro no
Si ro no o ko so de
Tche mi so mi te
A ka do si yo ri to
Fi to wa you nar.

(山城の
城のお小袖
血にそみて
赤年寄と
人はいふなる)

A sou ma si no
San no no wa tari ni
Mi sou ma si te
Ta no ma no ki re te
O tsou rou ya ma si ro

(東路の
佐野の渡りに
水まじつ
田沼のきれて
落つる山城)

Fa tsi ou ye te
Ou me ga sa kou ra to
Sa kou fan na wo
Ta re ta ki tsou ke te
San no ni ki ra se ta.

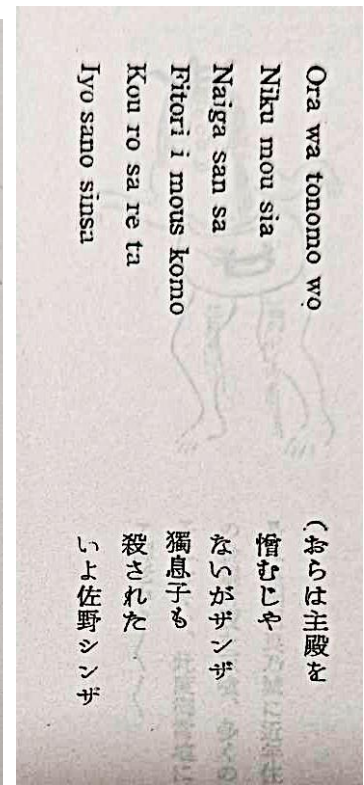
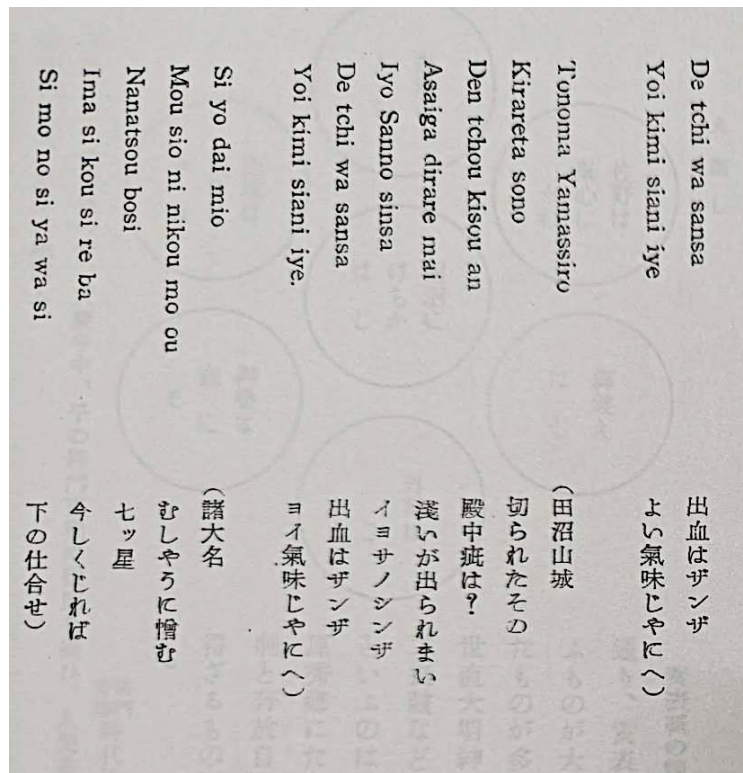
(鉢植ゑて
梅が櫻と
さく花を
たれたきつけて
佐野にきらせた)

Ki ra re ta wa

(斬られたは)

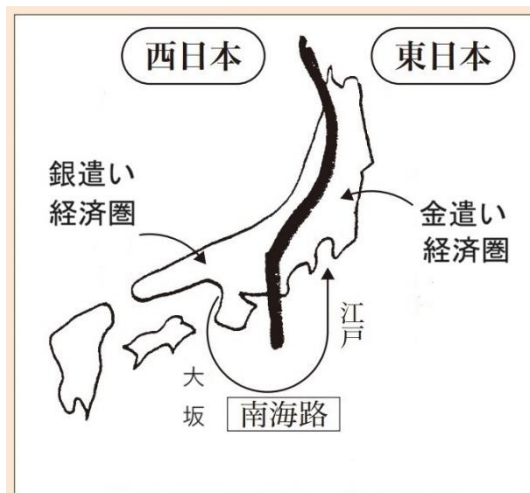
Ba ka do si yo ri to
You be ki ni
San no sin sa ye mi mon
Ko re ga ten mei
To no ma Yamassiro
Foukade sya naiga
Aita mi tat si
Ki ra rete nigerarou
Iyo sanno sansa.
De tchouwa Sansa
Yoi kimi siani iye.

ばかとしよりと
いふべきに
佐野新左衛門
これが天命(明)
(田沼山城
深手じやないが
あいたしみたし(？)
切られて逃げらる
イヨ佐野ザンザ
出血はザンザ
善い氣味じやなく)



(辻善之助著『日本文化史 別録四』より引用)

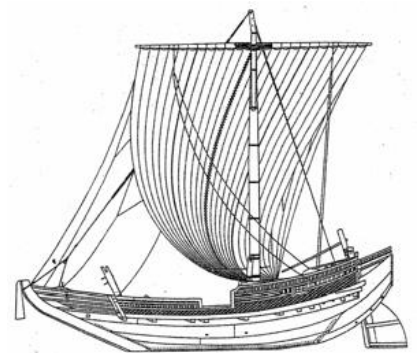
江戸時代の金遣い経済圏と銀遣い経済圏の違い



諸色は大坂から江戸に移入された。



徳川吉宗像 (徳川記念財団蔵)



大岡忠相

元文の貨幣改鑄の意味

江戸の旗本・御家人の経済的悩み→米価安の諸色高

旗本・御家人の収入

旗本…蔵米取と知行取 御家人…蔵米取

蔵米取は幕府浅草の御蔵から支給される俸禄 (米でもらう給料)

→旗本・御家人は蔵米取で得た米を換金した収入で、関西からくる諸色 (米以外の物) を買う。

※ 享保時代の金貨と銀貨の相場に注目

金貨1両=銀貨43~44匁の相場

銀貨の中に入っている銀の量を大幅に減らす。

↓

銀貨の中に含まれる銀の量を大幅に減らして、

金貨1両=銀貨60匁に

江戸で生活する旗本・御家人は1両で今までより

16~17匁分だけ余分に諸色を買うことができるようになる。

南鐐二朱判

田沼意次の先進性

自然経済が崩壊し、貨幣経済に移行していたことを認識した政治を行う。

・商業重視

専売制度の拡張（銅座・真鍮座・朝鮮人参座・鉄座の設置）

株仲間の積極的承認（運上金・冥加金の増徴）

長崎貿易制限の緩和（銅・俵物で中国に支払い）

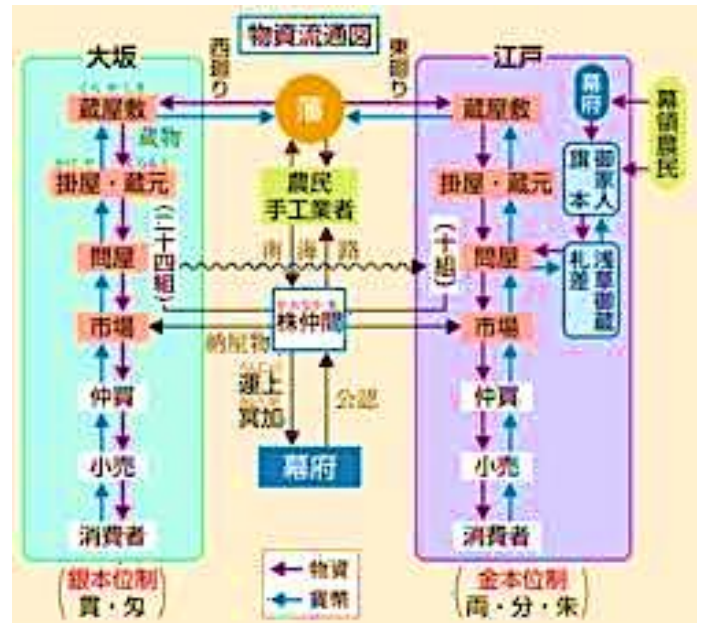
南鐐二朱判（銀）の鑄造

・開発計画

印旛沼、手賀沼の干拓計画…4,000 haの水田と

幅10mの仙台米の輸送路の確保のため

蝦夷地の開発計画…農地獲得とロシア貿易を計画



田沼意次の南鐐二朱判（銀）鑄造の意味

銀貨の単位…^{もんめ}匁 金貨の単位…1両=4分=16朱

銀貨南鐐二朱判（銀）×8枚=金貨1両と固定する

南鐐二朱判（銀）という銀貨を鑄造して東日本の金遣い経済圏と西日本の銀遣い経済圏を一つに結びつけた。



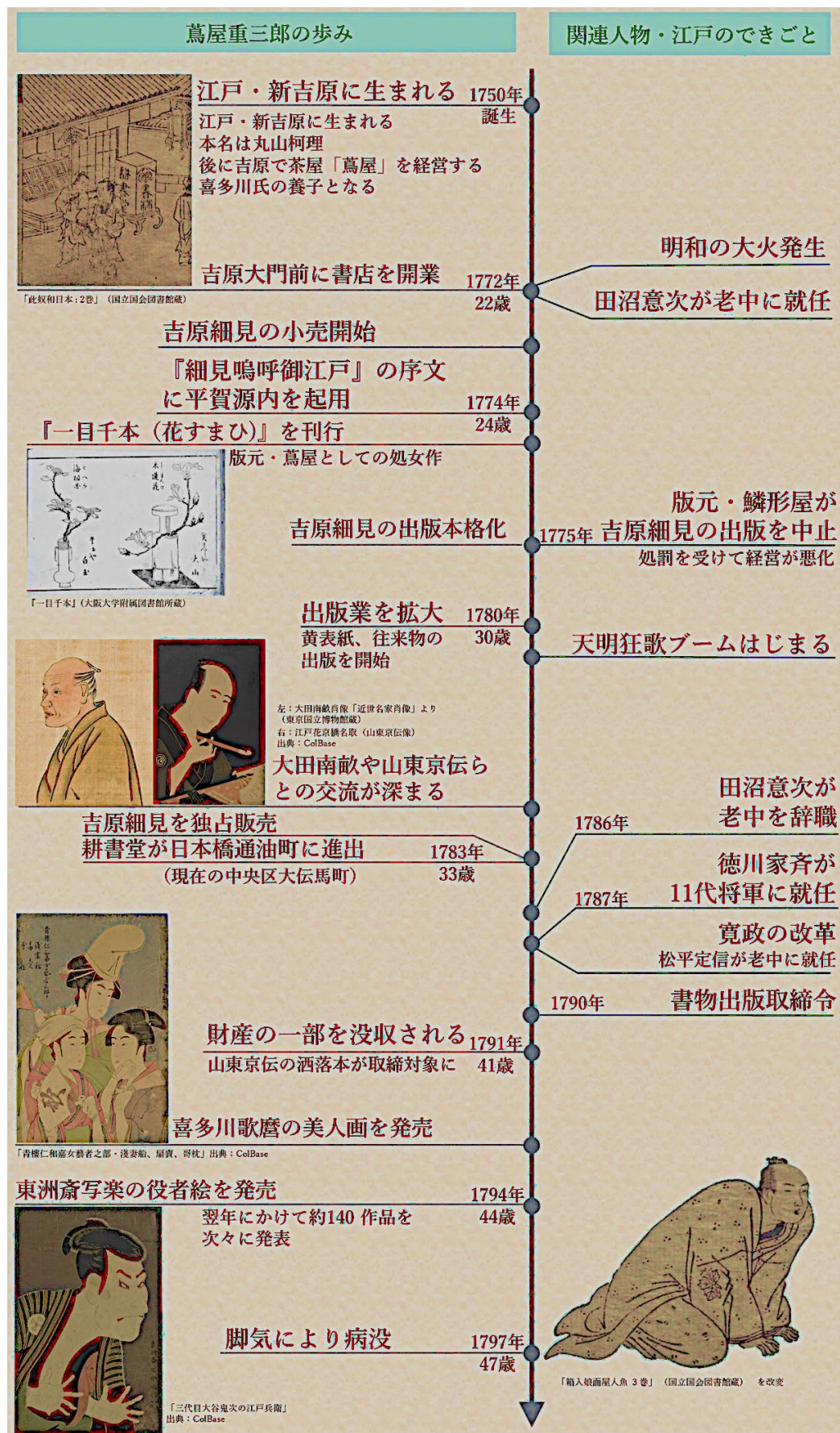
田沼意次

側用人（1767~86）・老中（1772~86）兼任



意次の子孫 東京高校元校長 故田沼道雄先生と

蔦屋重三郎の生涯



寺尾隆雄 都立白鷗高等学校・附属中学校時間講師 (元日本女子大学・文京学院大学講師 元大妻中高教諭)